

用区を知るには 15 回で充分であつた (50 cm×50 cm を 1 区画とする)。2 種の利用区及びその頻度は一致しない。お互にずれている。小川の各地点での 2 種類の混合比率のいろいろの場合の行動域には、それぞれの種類としてのすみ分け的な行動域に一連のうつりゆきがあることが分つた。この 2 種類の淵における共存のしかたは割合として個体数の多い種がよいところを占め、少ない方は端にいる。アメンボの方が少ない場合はオオアメンボの行動域の端に小さく位置をしめるが、オオアメンボが少ないときは、アメンボの多いところをよけ乍らそのまわりや端の方をまわっている。この干渉作用をたしかめるべく、オオアメンボの多くいるところへアメンボを入れてアメンボを多くしてみた。お互の位置関係は逆転するありさまを示した。

### カササギの生態 I. 群れ生活 久保 浩洋 (佐賀大・文理・生)・菊地 泰二 (九大・理・生)

秋のカササギの群れは数十羽からなり、若鳥のマークの結果この群れはその年生れの若鳥と住みついでない (又はテリトリーをもたない) 成鳥からなるものと推察された。このような群れは、夏のはじめ巣立ちしたばかりの若鳥の群れと前年度から引続き経過した成鳥の群れとが何等かの形で合体してでき、既に夏の盛り頃には秋とほぼ同性質の群れとなると思われる。秋の群れは冬のはじめ頃分散して小群となり、その中の若干個体は一定の地域に住みつく傾向を示した。しかしその後テリトリーへの移行は観察できなかつた。また、群れとそのねぐらとの関係の調査は今後の研究に大きな意味をもつものと考えられる。

以上のことから、カササギにおいては群れとテリトリーとは対照的な生活の型であると考えられる。

## 生 態・細胞形態・遺 伝

(第 III 会場・第 2 日)

### ニホンザルにおける群れと stranger との関係

河合 雅雄 (日本モンキーセンター)

3 頭のリーダーをもつ大平山 (犬山) のニホンザルの群れについて、ボス級の stranger と群れとの関係を観察した。小ケージに stranger を入れ、群れの中におくと、群れの中での stranger の位置づけが簡単かつ明確に行われる。これは出合い頭の微妙な双方の態度の直観的な評価によつて決定されるのであつて、直接の力関係によらない。位置づけは stranger によつて一定でなく、群れのリーダーより上位となるもの、サブリーダーと同格のもの、ワカモノより下になるもの等いろいろある。ボス級の stranger を群れに放した場合、出合い頭に先住ボスとの間に順位が定まる。しかし、stranger が少しでも頭をもたげようとするので、ボスはこれを極力おさえようとするので、ときには激しい斗争も起り両者は重傷を負うこともある。stranger の多くは次第に順位が下り、しまいにはコドモよりも低くなる。しかし周辺部で群れより to relate される。

### アブラムシ自然集団の増殖と転換 I 小野 泰正 (東北大・理・生)

1957 年 5 月～7 月、野外に育てた南瓜の葉には生息するアブラムシ *Aphis gossypii* 自然集団について、増殖そしてその衰退の過程を解析した。特に集団衰退に際してみられる無翅集団からの有翅虫の出現の問題を中心として、個体数変動、同構成変動、および、新たに発生する有翅虫を、毎日又は隔日の調査ごとに取りのぞいて有翅虫発生数の変動と、その累積曲線をつくつて吟味した。有翅虫発生数は、無翅集団の一般的な増殖曲線がピークになつて後衰退する直後にピークをつくり、無翅集団の衰退がゆるやかな曲線を描く若干の場合は終りに近くピークがある。累積曲線は無翅集団のピークをさかいに急増するきれいな S 字状を描く。無翅・有翅の数的関係は増殖が顕著な無翅集団ではピーク実存数の少くとも 10～50% にあたる有翅虫が発生する。こうした集団をもつ葉は蔓の中ばより古い方にあり、これよりも古い葉でも有翅虫発生は顕著だが、より若い葉では次第に減少する。